【佳作】

見えないラインの向こうへ

釧路市立景雲中学校
３年　伊藤　悠緋

8 月 15 日、玉音放送を聞いて日本国民は戦争が終わったと思っただろう。だが昭和二十年八月八日にソ連は、日ソ中立条約を無視し、日本が降伏した後も千島列島を攻撃し、北方領土を占拠しました。

僕の曽祖母は、歯舞群島の志発島に暮らしていましたが、ソ連に島を奪われ、根室へと引き揚げて来ました。それから一度も故郷へは帰れていません。ビザなし交流などで行ける機会もありましたが、「日本の島と認められない段階では、意味がない」と拒否をしていたからです。

この故郷が奪われた歴史を僕達の世代はどれだけの人が知っているだろうか。僕達の生活には物や情報があふれていますが、自分達の国の歴史や問題には無関心に思えます。

例えば「北方領土」とインターネットで検索するとものすごい量の情報が飛び出してきます。なぜたくさんもの情報が出てくるのによく知らない、または無関心な人がいるのかと思いました。また、沢山の人達に「北方領土」という言葉を拡散していく事で故郷へ帰れない、または帰れないまま亡くなってしまった人達の事を多くの人に知ってもらいたいと願っています。また、四島を追われた人達の平均年齢は八十七歳を超えています。この問題を早く解決しなければなりません。

そして曽祖母は、「生きてるうちに島へ行きたい。あの島影を見るといつも思い出す」と言っていました。また、曽祖父はいつも「四島帰ってくればな」と口癖のように言っては、海を眺めていました。四島が帰るという願いは叶わないまま亡くなってしまいました。そして曽祖父の出棺の時はいつも眺めていたオホーツクを通り火葬場へと向かいました。その日はとても晴れていて空気が澄んでいるせいか貝殻島灯台、水晶島がはっきり見えました。僕は小学校 3 年生だったがその風景がその空気が今でも忘れられません。そして度々ニュースや新聞で、元島民の方が亡くなったという記事を目にする度、悲しいという思いと一刻も早く解決しなければと強く思います。そして、僕達世代が無関心でなく、関心を持ち大きく声を上げなければ、と強く思います。まずは、一人でも多くの人に根室に行ってオホーツク海を見てほしいのです。国後島、歯舞群島が目の前にある事を実感してもらいたい。とにかく想像以上に近いという事を見てもらいたいです。

そして、オホーツク沿岸地域に暮らす人達の生活を少し見てもらえると、「これはなんとかしなければならない」と思ってもらえるはずです。元島民の人達に残された時間はせまっています。また、最近は、北方領土に関する情報は悲しい内容ばかりです。ウクライナ情勢の影響で、北方墓参の中止や、貝殻島灯台にロシア国旗が上がっていた、北方領土の海の汚染、ゴミ問題。

そして四島にはロシアの人々が、そこで街を築き、生まれ育った人も多くいる事も目をそむけてはいけない事実です。争う、奪う立場でもなく、「共存」していきたいと感じました。平和に解決できる日を願って。